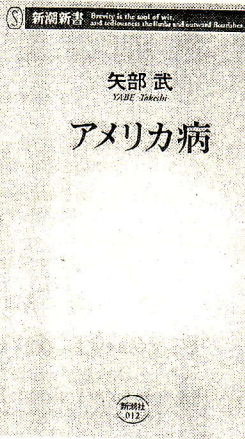


「アメリカ病」

矢部 武著



「外から見たとき、いかにも人権意識が高く、民主主義が進んでいるかのように見せるのが上手な国です」。知人の中国系アメリカ人のその言葉を、マイノリティの側のやや厳しすぎる意見ではと考えていたところ、マイケル・ムーア監督の映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』を観た。銃社会の現実を追うドキュメントで、これまでの米国についてのマスコミのあまりに偏った情報に愕然とさせられた。

さらにイラクへの理不尽な先制攻撃である。今、アメリカは確かに何かがおかしい。そう感じている人は多いはずだ。この書は、そんな疑問に答えるべく現在陥っている米国の〈病〉を日常の視点から個条的に取り上げている。

そこから浮かんでくる像は、得体の知れない強迫観念に脅え、それをこまかすため必死にあがいている姿だ。「常にポジティブであ

米の矛盾を日常的視点で

る」ことに疲れ過半数が精神科へ通い、三分の二が肥満になりながらもジャンクフードとファストフードを手放さない。術後の後遺症の危険を知りつつ顔の手術だけでは満足せず、豊胸やペニス拡大手術にまで手をだす。そして最も「生き易い」マッチョでグラマーな「白人」への変身を願う。

さらに銃社会がその不安に拍車をかける。毎年三万人近くの人が自殺や誤射も含め、銃で命を奪われている日々を著者は、国内で内戦が起こっているようなものだと言う。銃所持者は一般的に、声を荒げて感情的に話す人が多いが、時として冷静な語り口で国家が専制や独裁政治に走る抑止力として、「民主主義を守るため国民が銃で武装しなければならぬ」と信じきっている人にも出会うそうだ。そこにこそ、米国防社会の根深さと真の怖さがあると著者は述べる。

自由を求め建国された国が、その自由ゆえの銃所持を解決できないでいる。そこに横たわるのは建国とともにひきずってきたアメリカの矛盾と、そこから生じる「差別」構造ではないのか。アメリカの影が、少しずつ日本と重なって見えてくる本だ。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

◇やべ・たけし 1954年埼玉県生まれ。米紙記者を経てフリージャーナリスト。著書に「少年犯罪と闘うアメリカ」など。